

人文系私設図書館 Lucha Libro について

青木真兵、青木海青子
（人文系私設図書館 Lucha Libro）

1. 地方移住と「図書館」構想

■ 兵庫県西宮市から奈良県東吉野村へ「移住」（2016.4）

- ・ 体調不良（生来の心身薄弱のため、都市的ライフスタイルが限界に？）

3.11 をきっかけに「拠点」づくりを考え始める

「拠点」のモデルは内田樹氏の私邸兼道場「凱風館」

- ・ 新自由主義的価値観に基づく社会像への違和感がベース
大学における学問軽視への違和感、退職した大学教員の「蔵書」のゆくえ
大学図書館勤務での雑感、大学の方針への違和感
人文書購入を控える指示、学術雑誌以外のバックナンバーを廃棄する提案
- ・ 東吉野村の人口の推移
1867年 5284人 1967年 7354人 現在 1700人前後

■ 人文系私設図書館ルチャ・リプロの開館について（2016.6-）

- ・ 図書館のない村から「価値がない」とされている「人文知」の意味を問い直す
図書館、パブリック・スペース、研究センター、リトルプレス、雑貨の販売など
歴史や文学、思想、サブカルチャー、山村で暮らすための本など計 2000冊を超える
- ・ 土着人類学研究会、各種トークイベントの開催
土着人類学は、自分の中にある「病い」と私たちの社会の問題を認め、その問題を共有・研究し、引き受ける（「当事者研究」）
- ・ 2019年度のテーマ「答えのない時代と〇〇」場所、生き方、アカデミア、まとも…
建築家、ソーシャルワーカー、思想家、文化人類学者など
- ・ 各地のマルシェでの販売（リトルプレス）、出張図書館
機関誌『ルッチャ』を発行。『ルッチャ』発行をきっかけに、出版も（『彼岸の図書館』（夕書房））

2. 具体的な運営、利用の実際

■ 図書館の運営

- ・ 開館時間：日・月・火曜日（月 10日程度）、10-17時、4-12月（冬季は休業）
川の増水などによる臨時休館等もあり

- ・配架は NDC ベース、その間に小特集展示や、変則的な配架も多数
少ないながら自然科学や社会科学の本、コミック、雑誌も置いている
- ・閲覧無料。イベント参加費有料。貸出は一ヶ月、一人三冊まで。会員カードを作成すれば
遠方でも貸出可。予約が入っていなければ、一ヶ月間延長可
送料自己負担で郵送での返却も可能
寄贈受付はまずリストを提出いただいて検討
- ・貸出の管理は貸出時に自作のバーコードラベルを貼り付け、エクセルに記入
書誌情報を書き留める目録と、貸出返却簿を作成
利用者情報は利用登録申込書でアナログ管理
- ・村内の移住者や奈良県内外など 450 人が訪れ、計 200 冊の貸借 (2018 年度) があつた。
会員数 (貸出をする方) は現在 130 名程度。
奈良県内を中心に公立図書館等でイベント協力、講演、レフェラルサービスや機関リポジ
トリの案内も行う
- ・アクセスビリティ (地理的にも、資料の探しやすさという意味でも) を取上げて下げること
と、対話、また特殊な読書環境を整えることによって知への探求心を呼び覚ます。不便や
不足を楽しむ環境を作ることで、能動性を高める。サービスではなく、自分たちの生活を
可能な範囲で開き、シェアしている (「おすそ分け」)

■利用の事例紹介 (近隣、県内、県外)

- ・(近隣) 車で 20 分程度の隣町から。1~3 ヶ月に一回程度のペースでご来館
通常利用が多い。個人的にも交流ができ、プラーベートな話もするように
そのような話の断片から、本をおすすめすることも
- ・(県内) 車で一時間半弱の距離。1~3 ヶ月に一回程度のペースでご来館
イベントにもご参加。カレントアウェアネスなサービスも実施
- ・(県外) 九州方面より、年に 1~3 回程度ご来館。
お住まいの自治体に働きかけてくださり、講演に呼んでいただいたことも。

■図書館や学術機関、地域との連携

- ・レフェラルサービス、無料データベース、機関リポジトリ、ILL 等の利用支援
- ・奈良県図書館協会大学・専門図書館部会での講演
斑鳩町立図書館での講座、書評の寄稿
大学での講義、講演 (関西大学、駒澤大学、追手門学院大学、大阪樟蔭女子大学等)
- ・村の設備を利用し、村営シェアオフィスと合同で宿泊可能なイベントを開催 (「山学院」)
県内外から 60 名ほどが参加。次回より村の後援 (駅までの送迎など) を得られる
- ・奈良県下の書店、ギャラリー、ゲストハウス、お寺、飲食店等と連携してのイベント開催
- ・村在住のデザイナー、美術家と連携し、オリジナル商品の開発
- ・村民の利用率、参加率は現在そこまで高くないが、村のペースで考えることも地域に根を
下ろす一歩と考えている。また潜在利用者の利用推進より、現利用者にも目を向け、対面性、
現場性を重視している

参考図書

- 石原孝二編『当事者研究の研究』(医学書院、2013)
- イヴァン・イリイチ著、渡辺京二、渡辺梨佐訳『コンヴィヴィアリティのための道具』(筑摩書房、2015)
- 内田樹『街場の教育論』(ミシマ社、2008)
- 宇野重規『<私>時代のデモクラシー』(岩波書店、2010)
- 内山節『半市場経済 成長だけでない「共創社会」の時代』(角川書店、2015)
- マルクス・ガブリエル、マイケル・ハート、ポール・メイソン、齋藤幸平編『未来への大分岐 資本主義の終わりか、人間の終焉か?』(集英社、2019)
- ピョートル・クロポトキン著、大杉栄訳『相互扶助論』(同時代社、1996)
- エドワード・W・サイード著、村山敏勝、三宅敦子訳『人文学と批評の使命 デモクラシーのために』(岩波書店、2013年)
- ナタリー・サルトゥー=ラジュ著、高野優監訳、小林重裕訳『借りの哲学』(太田出版、2014)
- 嶋田学『図書館、まち育て、デモクラシー 瀬戸内市民図書館で考えたこと』(青弓社、2019)
- 鈴木大拙『日本的靈性』(岩波書店、1972)
- 鈴木大拙著、上田閑照編『東洋的な見方』(岩波書店、1997)
- 竹内愨『生きるための図書館』(岩波書店、2019)
- 中島岳志『「リベラル保守」宣言』(新潮社、2013)
- デヴィッド・ハーヴェイ著、渡辺治監訳『新自由主義 その歴史的展開と現在』(作品社、2007)
- ベンジャミン・R・バーバー著、山口晃訳『<私たち>の場所 消費社会から市民社会をとりもどす』(慶応義塾大学出版会、2007)
- 平田オリザ『下り坂をそろそろと下る』(講談社、2016)
- 広井良典『創造的福祉社会-「成長」後の社会構想と人間・地域・価値』(筑摩書房、2011)
- オギュスタン・ベルク著、篠田勝英訳『地球と存在の哲学-環境倫理を越えて』(筑摩書房、1996)
- ジャン・ボードリヤール『消費社会の神話と構造』(紀伊國屋書店、1995、訳書の原書は1976)
- まちライブラリー マイクロ・ライブラリーサミット実行委員会 2014 編『マイクロ・ライブラリー 人とまちをつなぐ小さな図書館』(学芸出版社、2015)
- 山本七平『比較文化論の試み』(講談社、1976)
- 横川和夫『降りていく生き方「べてるの家」が歩む、もうひとつの道』(太郎次郎社、2003)
- 吉見俊介『「文系学部廃止」の衝撃』(集英社新書、2016年)
- 和辻哲郎『風土 人間学的考察』(岩波文庫、1979)
- 『現代思想 12月号 図書館の未来』(青土社、2018年)
- 拙著『ルッチャ』創刊号～第三号(自費出版、2018-)
- 拙著『彼岸の図書館』(夕書房、2019)